

論 文

読書感想文から論文へ

——新学習指導要領と文章表現能力——

From Writing a Short Book Review to Writing a Critical Essay;

The New Course of Study and Writing Ability

山宮 里佳

Rika YAMAMIYA

キーワード：読書感想文、論文、新学習指導要領、文章表現能力

Key words: Short book review, Critical essay, The new Course of Study, Writing ability

1. はじめに

初等・中等教育課程で実施されている〈読書感想文〉に対しては、肯定的評価と批判的評価が共存している。「本を読んで深く考えることこそ、子どもたちの表現力を支え、人生をより深く生きる力につながる」<sup>i</sup>が肯定的評価の典型であり、「たくさんの生徒を作文嫌い・読書嫌いに追い込んでいる」<sup>ii</sup>や「取り上げられるべき『本』の性格とそこで書くべき方向とは、それと明示されていないものの、あらかじめ決定されているのだ、何と窮屈で、何と貧弱な作文活動なのだろう」<sup>iii</sup>等の言説が批判的評価の典型である。また生徒の反応に関しては、「青少年読書感想文全国コンクール」を主宰する全国学校図書館協議会発行の『学校図書館』<sup>iv</sup>2018年5月号掲載論文にも「一般に、生徒は読書感想文に対して苦手意識を持っている」<sup>v</sup>と書かれているように、〈生徒は読書感想文が嫌い〉というのは教育関係者に共通の認識となっているようである。しかし日本のほとんどの生徒が読書感想文作成の経験を持つことを鑑みると、この経験を高等教育課程での文章作成に役立てるといふ発想にも意義があるのではないだろうか。また中等教育課程の段階にあっても、新学習指導要領が目指す〈論理的な文章を書く力〉や〈文学作品を多角的に読む力〉の涵養に寄与できるものもあるだろう。

本稿では上記の視点に立ち、読書感想文が目的とする〈感動の自覚と表現〉を基に、高等教育課程が目指す文章表現能力へと架橋する試みを提案する。

2. 〈読書感想文〉とはどのようなものか

本章では初等・中等教育課程における読書感想文指導の大きな原動力となっている「青少年読書感想文全国コンクール」に焦点をあてる。全国学校図書館協議会 HP<sup>vi</sup>によると、「学校図書館が民主的な思考と、自主的な意思と、高度な文化とを創造するため教育活動において重要や役割と任務を持っている」という宣言の下で同協議会（以下、協議会）が発足したのは、1950年（昭和25）2月である。戦前の教育への反省と、民主的社会の実現への強い意志が感じられる宣言文である。そして1955年（昭和30）には「青少年読書感想文全国コンクール」が協議会の主催、毎日新聞社・毎日小中学生新聞・文部省（現文部科学省）の後援により始まった（毎日新聞社は第2回より主催者に移行、第20回からは総理府が後援に加わる）<sup>vii</sup>。コンクールの目的は「児童生徒・勤労青少年を対象に、読書活動の振興等」であるとされ、毎年実施されている（勤労青少年の部は第59回まで）。

コンクールは個人単位ではなく学校単位での申し込みに限られ、9月中旬が締め切りで校内審査・地区審査・都道府県審査を経て中央審査会に送られる。そして最終

的に内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・毎日新聞社賞・全国学校図書館協議会長賞・サントリー奨励賞が選考・表彰されている。受賞作品は毎年『考える読書』という書籍にまとめられて毎日新聞社から発行されている。(因みに「考える読書」という書名は、1965年(昭和40)第11回受賞式での当時の「皇太子殿下おことば」から採ったのだという)<sup>viii</sup>

コンクールが始まったことで日本には独特の「読書感想文というジャンル」が生成された<sup>ix</sup>といわれるように、読書感想文のイメージは、後述するが多くの人々にとって夏期休暇の課題と強く結びついている。そして夏期休暇に読書感想文が課されるのは、コンクールへの出品作品を選考したいという小・中・高等学校側の理由によるものである。ただ課題とするにあたって、担当教員がコンクールの校内選考対象とすると明示しているとは限らないのが現状である。

次に読書感想文は今日どのような目的を持ち、どのような文章が目指されているのかについて述べたい。前述HPには「読書感想文Q&A」というコーナーがあるが、以下にいくつかのQ&Aを抜粋する。

- Q. 読書感想文は、何のために書くの？
- A. 書くことによって考えを深められるからです。(中略) 読書感想文は自分自身の記録です。読み返すことによって、いつでも「感動した自分」に出会うことができるのです。
- Q. どんな本を読んだらいいんだろう？
- A. 自分の心を突き動かしてくれる本が、その人にとっての『よい本』だといえます。自分に合った、心を動かされる本を探してみましょう。
- Q. 読んだ本の本文や解説を引用してもいいかな？
- A. 読書感想文は、本を読んだ自分の思いや心の動きを中心に書くものですから、できるだけ自分のことばを使って書くようにしましょう。
- Q. 題名はどうつけたらいいですか？
- A. (前略) 自分が一番感動したことやもっとも言いたいことの、中心となる言葉を考えて題名にするといいでしょう。
- Q. 字数は規定の字数以内なら何字でもいいの？
- A. 本を読んだ感動や本を読んで考えたことを(中略)

書き表すためには、ある程度のことばの量が必要で  
す。／思いっきり読書の感動を表現してみましょう。

- Q. 何をどう書けばいいか、全くわかりません。
- A. 本を読んで自分がどこに感動したのか、なぜ感動したのかを考えましょう。(中略) 自分の生き方や経験と本の世界を照らし合わせると、いろいろなことが見えてきます。(中略) どう書けば自分の心の動きにぴったりするか、それがうまく人に伝わるかを考えましょう。／書き終わったときには、それまでとはどこか少し違った自分になっていることに気づくはずです。

下線は引用者によるが、これらを見て気づくことは執拗ともいえる「感動」の強調である。Q&Aをまとめると、「読書感想文」とは本を読んで「感動した自分」の記録であり、人生経験と照らし合わせながら本の内容を理解して、自分の心の動きをそのまま表現しつつ読者に伝える文章である、といえる。ただ、将来「読み返」すための記録という目的と、読者に伝わる文章を書くという目的を両立させるのは至難の業であり、このQ&A全体をわかりにくいものになっている。

ともあれ、児童・生徒は感動することと、読書を通じての自己変革を求められている。読書活動の振興というコンクール当初の目的に加えて、読書の証としての〈内面の変容〉が要求されている。感想文は課題図書だけでなく、科学・種々のテーマのノンフィクション・外国作品など、どのようなジャンルの読書体験について書いてもよいとされているが、自己の「生き方や経験」に照らして読むことが想定されている状況下では、これらのジャンルは選ばれにくい。少なくともコンクール入賞作品のほとんどは、日本の文学作品か、人道的なテーマを持つノンフィクション作品についての感想文である。このような結果や協議会の方針が、読書感想文担当教員の評価基準に影響を与えている可能性は高い。

感動の直截な表現と、表現による自己省察や自己変革、これらが教育現場で課題という形で求められる場合、読書の結果として感動を表すのではなく感動のために本を選んで読む、という転倒につながりがちであることを指摘したい。

### 3. 〈読書感想文〉への反応

冒頭でも触れたが、読書感想文への大学関係者の反応は芳しくないものが目立つ。例えば、

この文章には目的がないのである。感想文は書評とは違って、本を紹介・批評することを目的としているわけではない。(中略)感想文は問いも主張も論証もなくてすむ<sup>vi</sup>。

読書感想文を書いて読んでもらう必要性がないということだ。もし、ある本を読んで感動したならば、それを心に刻み込んでおけばいい。もっとたくさんの人にその本を読んでほしいと思えば、「推薦文」を書けばいいのであって、感想文を書く必要はない<sup>vi</sup>。

などの批判は、前章で述べたように日本の読書感想文の定義が〈読書の感動の表現〉という、いかようにも解釈できるものであることに起因する。目的を持った文章である〈論文〉に比べて、〈書評〉と〈随筆〉と〈記録〉の要素を併せ持つ〈読書感想文〉は芸術的・批評的・内省的表現の融合を求める不可思議な文章といえるからである。

また、感想文が読み手をはっきりと想定していない文章であることは、

せっかく書かれた感想文を読むのは先生一人だけだ。それなら先生に「こんな本を読みました」といってお話をすればいいだけだ(中略)そこまで苦勞して書いた感想文をちゃんと読んでくれているのかも怪しい<sup>vii</sup>。

との批判を生む。公刊が前提である〈論文〉とは違い、〈読書感想文〉は選出されれば公になる可能性がある(選出回数によって読者数が段階的に増加する)という不確定な要素を持つ文章だからである。

これらの問題に対して筆者は「文章表現法」講義の中でアンケートを行ったので、以下にその結果を紹介したい。対象は2018年度文学部中国文学科・書道学科3・4年生対象「文章表現法」受講生である(回収数56)<sup>viii</sup>。

まず、読書感想文を書いた時期は小学生・中学生の頃がほとんどであり、高校生の中に書いた経験のある者は5名であった。

次に読書感想文の担当者は誰であったかの質問には、79%が国語科教員と答えた。因みに作文の担当者は86%が学級担任と答え、対照的な結果となっている。

また、読書感想文を学校生活のどのようなタイミングで書いたかという質問には、感想文自体を書いたことがあると答えた者55名のうち、37名が夏休みと答えた。

他の質問と回答については箇条書きに示す。

Q. 読書感想文を書くとき、あなたの意識の中では誰に向けて書いていましたか。(複数回答)

- A. 担当の先生……31名  
読み手……11名  
自分……7名  
これから当該作品を読む人……6名  
わからない……4名

Q. 担当の先生はあなたの文章を添削してくれましたか。

- A. 添削された……18名  
添削されない……35名  
無回答・わからない……3名

Q. 担当の先生は読書感想文を、何を基準に評価したと思いますか。(自由記述)

- A. (自由記述の傾向をまとめた結果)  
文章の正しさ……26名  
内容……22名  
文章の構成……17名  
言いたいことが読み手に伝わっているか……10名  
起承転結があるか……7名

そして最後に読書感想文を書いた経験をどのように受け止めているか、自由な記述を求めた。講義中のアンケートであることを考慮して、デメリットを自由に書いてよいこと・アンケートの回答は成績に影響しないこと(提出をもって当日出席とみなすこと)を同時に伝えた。

筆者はデメリットを挙げる学生が多いのではないかと予想していたのだが、「なぜ書くのかわからない」・「面倒」などの否定的意見のみを挙げた者は、3名であった。ほとんどの受講生は「表現力がついた」・「感想文を書いたことによって本の内容がよくわかった」・「言葉選びの力がついた」などの何らかの肯定的意見と否定的意見の双方を述べていた。その際「今になって思うと役に立った」という形でメリットを挙げた者が多かった。アンケート実施講義が国語科教職関連科目であることを鑑みると、この結果が文学部学生全体の意見を真に反映しているかには追加の調査が必要と思われる。しかし、全くメリットがなかったと考える学生は少ない、という結果を導くことはできる。

以上のアンケート結果からは、次のようなことが読み取れる。

読書感想文は夏期休暇の課題としてのイメージが強く、担当教員を主な読者と想定して書かれることが多い。(読み手)を想定して書くときと答えた者に詳しく尋ねると「学校の何人かの先生かな?審査する人かも?」という答えが多く、(読み手)というのは漠然としたイメージのようである。また6割以上は添削を受けておらず、ほとんどの生徒は目指すべき読書感想文を手探りで推測するにとどまる。評価基準を(文章の正しさ)・(内容)であるとされた者が多いが、本集計では(内容の深さ)や(しっかり書いて(考えて)いるか)と答えた者も(内容)と回答したと扱っている。

読書感想文や課題図書が「青少年読書感想文全国コンクール」と密接に結びついていることは、児童・生徒にある程度認識されている。ただ自らが提出した読書感想文がそもそも審査対象になるのか、誰が審査しているのか、審査の過程やその基準についての説明はほとんどなされていないのが現状である。協議会HPの開設は2001年ということだが、閲覧したことのある受講生はいなかった。府川源一郎は「読書感想文再考」<sup>xv</sup>の中で「『読書感想文』は、何を書いてもいいようだが、実は隠された文章作成の決まりや枠組みがあって、それがはっきりと書き手に開示されていない」ので、書き手に「場や状況の文脈を読み解く力」を「暗黙のうちに要求」していると述べている。本アンケートで感想文評価基準を(内容)・(深さ)・(しっかり)という言葉で表現した学生は、学校という「場」に多少なりとも在る、自己省察を伴う前向きな姿勢を善とする価値観を「読み」、その表出が求められていることを体感しているのだろう。

#### 4. 読書感想文を活かすために

本章では、このように批判されることの多い読書感想文を、どのように学生の文章表現能力育成に活かしているかを考えたい。筆者がこのように発想したのは、現実的な問題として今も児童・生徒は多くのエネルギーを読書感想文活動に費やしていること、今後しばらくはこの傾向が続くであろうこと<sup>xvi</sup>、また過去を振り返って感想文に利点を見出している学生が多かったことからである。さらに『ライティングの高大接続』は高等学校「国語」では「書く」経験が少ないという調査結果を報告しているが<sup>xvii</sup>、それ故にこそ「書く」行為と中学・小学校時代の読書感想文との連想が強いことも予想される。筆者の担当は文学部学生であるため、ここでは対象を(文学作品を読解して批評的文章や論文を書く学生)と想定することとする。

1976年に日本文学研究者、三好行雄は文学研究とは何かを追究して、「研究主体と対象をつなぐへその緒を切る」ことが必要であり、「正と負のいずれであれ、みずからの(感動)からは論をはじめないという覚悟も必要で、自分の美意識や感受性を信じすぎるのは危険である」<sup>xviii</sup>と述べた。三好は従来の文学研究にみられた鑑賞的態度と決別し、作家と作品と研究主体の「干渉と癒着」を避けて文学研究を文学史の体系の中に位置付けようとした。「へその緒を切る」とは「対象を現代にまで連れもどさないこと」、すなわち現代を生きる研究主体が抱いている諸問題を研究対象に「投影」しないこと、を意味する。これは読書感想文が持つ、読書活動を通して人生を考えるという指向とは正反対の意識である。

研究としての在り方と学習活動を同一視することができないのは当然である。だが三好は研究の発端を、「あらゆる陶酔やロマンティシズムとかかわりなく」「知的好奇心」にのみ求めるべきと述べており、このあたりに読書感想文と研究の文章を繋ぐ回路が見えてくるのではないかと。

筆者は「文章表現法」講義において、作文や読書感想文について学生自身の経験を振り返るグループワークを行った後、作文指導の歴史的経緯や「青少年読書感想文全国コンクール」が目指すものを説明している。その後、実際に「感想文」を書いてみようという試みで中島敦の『山月記』(1942年)の感想文を課している<sup>xviii</sup>。分量は「コンクール」の規定と同じく2000字以内である。事前に、完成後3人程度のグループでピアレビューを行い、その後教員に提出することを伝えた。その結果は非常に多岐にわたるテーマの提出であった。

芸術と人生の問題・「李徴」の変身の意味・変身の肯定または否定・動物と人間の差異・他者の視点と自己の視点とのずれ・友情への注目・「李徴」の詩に足りないものとは何か・ファンタジーとは何か・「国語」における教材価値について、等々であり、『山月記』研究史における過半のテーマが提起されていると言ってよい。学生は(感動を表現すること)という課題から豊かなものを引き出している。(生き方と照らし合わせる)という発想はなじみ深いようで、作品から想起された読書体験や自己の直面する問題を生き生きと語る学生が多かった。一つのテーマに絞って2000字程度の文章を構成するということは難しく、文章中に様々なテーマが含まれているものが大半であったが、作品と向き合う過程で思い浮かんだことをできるだけ披歴しようとする姿勢は貴重である。

協議会HPのQ&Aには「なぜ感動したのかを考えましょ

う」とあるが、まず「感動」の源には共感や発見、疑問や反感の感情があることを自覚し、さらにその一つに焦点化して背景や仕組みを分析していくという二段階の試みを提案したい。焦点化した感情の内にテーマを見出し先行研究に出会ったり、自分自身への興味を超えて問いを他者と共有し議論する「知的好奇心」に到達する可能性が見出せるからである。このような感想文の目的を予め示すことで、書き手が「感動」に呑み込まれてしまうのではなく〈分析する〉という自覚を持つことを目指している。また、感想文の読者を伝えておくことも重要である。誰が読むのか、は開示する感情の種類や程度を左右するからである。

田中実『小説の力 新しい作品論のために』<sup>113</sup>の中で、「対象としての文学作品を解明する行為は、自らの〈感動〉を掘り起こす作業に変わらざるを得ない」と述べている。田中の理論では〈読み〉とは「対象によって自己の内面に顕れた自己の現象」を読むことであり、読書行為の究極の目的を、自己内部の現象を超えて「到達不可能な〈本文〉」に出会い続けることとしている。この〈本文〉の概念は難解だが、筆者の理解では〈私〉が了解し得る作品世界の「彼方」にある本来の「作品そのもの」であり「了解不能の《他者》」である。

田中は「《他者》との葛藤によって読書主体の方を瓦解させ」ていく行為を目指す、「感動」とは「瓦解」の第一歩だと捉えることができるだろう。「感動」は様々な感情の複合状態であり、その詳細な分析を通じた読解が「〈感動〉を掘り起こす」ことの具体的作業であると思われる。

## 5. おわりに

昨今〈高大接続〉がよくいわれる。2018年3月には次期高等学校学習指導要領が公示され、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けて「過程を重視した学習の充実」(総則)がうたわれている。国語に関しては必修科目の「現代の国語」で、「話や文章に含まれている情報」について「主張と論拠」や「推論の仕方」を理解し、「引用の仕方や出典の示し方」を身につけることが目指されている。また選択科目の「文学国語」では作品の「評論」を参考にしながら「論述」や「討論」を行い、「書評」や「短い論文」を書くという指導が提案されている。これは大学で行われているレポートや論文指導に重なるものであり、高等学校「国語」において〈読解〉から〈批評〉へという転換があることがわかる。日本の高校生に作品への「批評」意識が乏しいことや、感想ではなく「批評を書く」

という方向を目指すべきという指摘は従来からあった<sup>114</sup>のだが、新学習指導要領はこれらの主張に追従する形となっている。これは、情報化社会の進展や2015年のPISA(OECD学習度到達調査)〈読解力〉の順位<sup>115</sup>の下降<sup>116</sup>という国際的な要因と、大学進学率の増加と18歳人口の減少が要請する大学教育の変容という国内的な要因が〈批評的精神を持つ生徒を育てる〉という目的の一致をみたものといえるだろう。大学教育に円滑に適應できる生徒の育成が、社会の多方面から求められているのである。

であればこれを好機と捉え、文章表現教育においても「論文」・「批評的文章」に「読書感想文」の発想を活かす方途を探ることが有効であろう。文学作品を自分の人生上の問題に引き寄せて心動かされたとしても、その感動をさらに分析することによって普遍的な問題にたどり着くことは可能である。重要なのは、「感動しました」、「私も主人公のように生きたいと思います」などのパターン化された文言が生徒から提出されたとしてもそれを大切に、さらに背景を探ろうとする試みである。筆者はそれを学生から提出された〈読書感想文〉から学んだ。なぜ今までにない感覚を覚えたのか、それらを問い続けるうちに、作品の歴史的<sup>117</sup>位置に気づいたり、作品構造の分析や語り<sup>118</sup>の問題にたどり着くことを目指したい。中等教育課程では分析を完成させることよりも、感動の背景に何があるのか、と自問する能力を養うことを目的とすべきだと考える。その能力がやがて高等教育課程においては、事象の背景を探り分析する力や、先行研究や他者との〈対話〉を通じて自己の考えを確立する基礎となるからである。

<sup>114</sup> 山田律子「島で育てる表現力」(『学校図書館』2018年5月、全国学校図書館協議会)

<sup>115</sup> 戸山田和久『論文の教室 レポートから卒論まで』(2012年8月、NHK出版)

<sup>116</sup> 向後千春『書く力』がつく最強最知プログラム(荒木晶子・向後千春・筒井洋一『自己表現の教室—大学で教える「話し方」「書き方」』2000年4月、情報センター出版局)

<sup>117</sup> 『学校図書館』は、夏期休暇中の課題とされることが多い「青少年読書感想文全国コンクール」への出品感想文指導の便宜を図るため、毎年ほぼ5月号で読書感想文を特集している。

<sup>118</sup> 岩田佳菜子「西南学院高等学校における読書感想文指導について」(『学校図書館』iに同じ)

<sup>119</sup> <http://www.j-sla.or.jp/> (閲覧2018年4月29日)

<sup>120</sup> 総理府は第31回からは総務庁、第47回からは内閣府となる。(主催・後援者の変遷については全国学校図書館協議会研究調査部にご教示いただいた)

<sup>121</sup> 『考える読書』毎日新聞社、2017年4月より。この経緯は

毎年掲載されている。

- <sup>ix</sup> 石川巧『「いい文章」ってなんだ？—入試作文・小論文の歴史』ちくま新書、2010年6月
- <sup>x</sup> iiに同じ
- <sup>xi</sup> iiiに同じ。
- <sup>xii</sup> iiiに同じ。
- <sup>xiii</sup> 2018年4月19日（木曜日）3・4時限目実施。回収数は3時限目40、4時限目17。当日の出席者全員から回収した（履修者数は3時限目49名、4時限目18名）。
- <sup>xiv</sup> 『日本語学』2005年5月
- <sup>xv</sup> 前掲vi『考える読書』によると、第62回コンクール応募作品総数は4,376,313編である。
- <sup>xvi</sup> 渡辺哲司・島田康之著、ひつじ書房、2017年6月、p.14。一般に言われているがデータがほとんどなかったことを調査によって確認している。
- <sup>xvii</sup> 「作家論の形の批評と研究」（『三好行雄著作集第五巻 作品論の試み』1993年2月、筑摩書房）初出は「作家論の形の批評」（『岩波講座 文学9』1976年4月）
- <sup>xviii</sup> 現行の高等学校教科書への採用率が高く、ほとんどの受講生に読書経験があるからである。
- <sup>xix</sup> 「終章 新しい〈作品論〉のために」大修館書店、1996年2月。
- <sup>xx</sup> 前者には石原千秋『国語教科書の思想』（ちくま新書、2005年10月）、後者には府川前掲論文（xivに同じ）などがある。また、アメリカ、ニュージーランドで教鞭をとった英文学者である千種・キムラスティーン氏からは、英語圏への日本人留学生が、essay の概念、特に引用・出典の書き方に疎い傾向があるとの指摘を受けた。
- <sup>xxi</sup> 4位から8位へ。

（文学部中国文学科非常勤講師）